

第二百七十三話 もう一人のマレーの虎 怪傑ハリマオ参上

黒いサングラスに、白いターバンを巻き、二丁拳銃姿で颯爽と登場する「怪傑ハリマオ」（東南アジア版西部劇、日本テレビ系で1960～1961年にかけて放映された冒険活劇、全65話）の正体は日本の海軍中尉大友道夫である。尚、ハリマオとはマレー語で「虎」を意味する。三橋美智也の歌う主題歌と共に当時の子供達を熱狂させた。このテレビ映画は、実在の人物「谷豊」を題材にしており、彼が活躍したのは日本の特務機関の働きによるものである。戦時中の1943/6/24「マライの虎」として映画上映されている。



1 怪傑ハリマオこと「谷豊」について

明治末期に福岡から移住してきた谷一家の大黒柱が支那人暴徒に惨殺され、長男豊は偶々九州に居り難を逃れることが出来た。このことが彼の運命を大きく変えた。遂には義賊となり、マレー半島で華僑を襲う盗賊団となり、部下3,000人と言われた。ハリマオは、大胆さと知略、俠気を兼備しており、マレー人の信望を集めた。

2 大東亜戦争開戦劈頭の上陸作戦

帝国陸軍第18師団の佗美（たくみ）支隊はマレー半島のコタバルに上陸し、日英開戦の火蓋が切って落とされた。これは真珠湾攻撃に先立つこと1時間50分前の出来事であった。この成功の裏にはハリマオの活躍があった？

3 F機関のハリマオへの働きかけと功績

特務機関については、66話参照。F機関は当初マレー作戦支援に従事し、爾後自由印度仮政府軍の育成に寄与した。F機関（藤原岩市中佐）のマレー工作には、・インド兵、インド人工作 ・マレー人の反英民族主義運動組織、マレー青年同盟（YMA）を支援して協力を促す「亀工作」 ・マレー人の反英、対日協力を醸成するためマレー人匪賊頭目ハリマオ（谷豊）を活用するハリマオ工作 ・北スマトラのアチェ族の反英闘争を支援する「スマトラ工作」の5つがあったという。

F機関員であった神本利夫の説得により、谷豊は日本軍に協力するようになった。谷豊が何故日本軍に協力するようになったのか？英国の植民地支配の現状を具に見聞し義憤を感じていたことが大きいだろう。また、小さい頃の悲劇も重要なファクターではあろう。が、F機関長の姿勢に共感したこともあるものと考えられる。機関長は、『私達の仕事は、力をもって敵や住民を屈服するのではない。威容をもって敵や住民を威服するものではない。私達は徳義と誠心を唯一の武器として、敵に住民に臨むのである』と述べていたという。

谷豊は残念ながら、大戦中にマラリアに感染しマレー人として没した。

4 ハリマオ工作の成果

土地勘もあり、日本軍上陸地点の選定、英国軍インド傭兵の解放工作、ダム破壊阻止などに活躍したという。ハリマオ工作以外の所謂[KAME]工作（マレー人の反英民族組織）と密接に連携してマレー兵を投降させ、破壊活動をも成功させた。

英軍は最後までハリマオ工作に気付かなかった由。

5 関連書籍等

「F機関」藤原岩市 原書房

*1985年某新聞が「ハリマオの虚像と実像」と題する記事を掲載し、「つくられた英雄だった」と断じた。これが奇貨となって、以下の書籍が刊行されたと思考する。

「マレーの虎 ハリマオ伝説」 中野不二夫 文春文庫

「神本利夫とマレーのハリマオ」 土生良樹 展転社